

平成25年度  
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI  
(研究成果の社会還元・普及事業)  
実施報告書

HT25061

ゲーミング・シミュレーションを通して現代経済社会の本質を理解する



開催日：平成25年8月3日(土)

実施機関：千葉工業大学  
(実施場所) (津田沼キャンパス)

実施代表者：遠山 正朗  
(所属・職名) (社会システム科学部 プロ  
ジェクトマネジメント学科・教授)

受講生：高校生7名

関連 URL：

### 【実施内容】

・受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

今回のプログラムでは、高校生自身が能動的に思考する機会を十分に確保できるよう、ゲーミング・シミュレーションによる実習を行った。また、受講生1名に対して実施協力者となる学生1名以上を配置することによって、受講生の積極性を側面から引き出せる支援体制を組んで実施した。

#### ・当日のスケジュール

- 9:30～10:00 受付(津田沼キャンパス1号棟10階エレベータ前集合)
- 10:00～10:20 開講式(あいさつ、オリエンテーション、科研費の説明)
- 10:20～10:40 講義「ノーベル経済学賞ってなに？／取引に注目すると現代経済社会の本質がわかる(講師:遠山正朗)」
- 10:40～11:10 実施者との交流・クッキータイム
- 11:10～12:00 実習「ゲーミング・シミュレーションによって現代経済社会を理解する(1)」
- 12:00～13:00 昼休み
- 13:00～13:50 実習「ゲーミング・シミュレーションによって現代経済社会を理解する(2)」
- 13:50～14:20 研究室見学
- 14:20～15:10 実習「ゲーミング・シミュレーションによって現代経済社会を理解する(3)」
- 15:10～15:40 実施者との交流・クッキータイム
- 15:40～16:30 実習「ゲーミング・シミュレーションによって現代経済社会を理解する(4)」
- 16:30～16:40 休憩
- 16:40～17:00 まとめ「どのような取引のシステムが私たちの生活をより豊かにするのか」
- 17:00～17:30 修了式(アンケート記入、未来博士号授与)
- 17:30 終了・解散

#### ・実施の様子

最初は講師からの講義。受講者はまだ緊張感につつまれた様子。



クッキータイムでリラックスモード。実施協力者として多くの学生を各テーブルに配置したこともあって和やかに。



各自で政策を考えて実行。計算結果も各自で記入。



未来博士号の授与。全員無事修了。



#### ・事務局との協力体制

事務局が、委託費の管理、支出報告書の確認、振興会への連絡調整および提出書類の確認・修正、広報資料の作成・手配、大学ホームページへの掲載、受講希望者との連絡、当日の受付、写真撮影等、数多くの仕事を担当することによって、当事業の円滑な運営が導かれた。

#### ・広報活動

実施者は実施協力者とともに近隣の高校を訪問し先生に対して本事業のPRを行った。高校生に対してはオープンキャンパスの際に当事業が開催される旨、案内した。また、多くの高校に開催案内を郵送するとともに、大学のホームページへの募集案内の掲載、タウン紙への募集案内の掲載等、事務担当者、実施協力者、実施者の協力のもと、さまざまなかたちで広報活動を行った。

#### ・安全配慮

実施にあたり、受講生と実施協力者には短期の傷害保険に加入してもらった。また、受講生1人に対して1人以上の実施協力者を配置することによって、大学に不慣れな受講生に不測の事態が生じないよう、体制を組んだ。

**・今後の発展性、課題**

終了後に行ったアンケート結果の一部を見ると次のとおりである。

今日のプログラムはわかりやすかったですか。

- ・とてもわかりやすかった 57%
- ・わかりやすかった 43%
- ・わかりにくかった 0%
- ・わからない 0%

科学に興味がわきましたか。

- ・非常に興味があった 29%
- ・少し興味があった 71%
- ・興味がわかなかった 0%
- ・わからない 0%

研究者からの話などを聞いて、将来、自分も研究をしてみたいと思いましたか。

- ・とても思った 14%
- ・できればしてみたい 86%
- ・思わなかった 0%
- ・わからない 0%

これらに見ることができるよう、実施内容を理解し、興味を示し、そこに自分の将来像を描くことができたようである。今回のプログラムでは、現代経済社会の取引をシミュレートするためのゲーミング・シミュレーションを行い、また、受講生1名に対して実施協力者となる学生1名以上を配置したことが大きな工夫であったが、これらのことが十分機能しての結果であると推測される。こうした方法は学生を対象とする授業においても採用しており、効果を実感していたため、今回もこうした効果は実施前より期待していたものであったが、十分にその効果を発揮したものと感じている。今後も改善を重ねて実施していきたいと考えている。

**【実施分担者】**

**【実施協力者】**              19       名

**【事務担当者】**  
研究支援部 産官学融合課 係長 篠崎 夕美子